



マンニスト教会と教区センター

設計：ユハ・レイヴィスカ
フィンランド，クオピオ 1986-92
Männistö Church and Parish Center
Design: Juha Leiviskä
Kuopio, Finland 1986-92



SYUNKEN

駿建

1996.1 Vol.23 No.4 学期末号
日本大学理工学部 建築学科
短期大学部 建設学科建築コース

ユハ・レイヴィスカの建築は、水平性と垂直性の緊密な交錯によって形づくられている。

水平性は平面計画，垂直性は立面と断面計画である。平面図を見ると，単位形を連鎖させたもの，中庭を囲んだもの，平行する筋状のもの，放射状のものなどなど，さまざまなものがあって変化に富んでいる。フィンランドの厳しい自然，とりわけその地勢や地上の様相を解釈し，いずれも大地を這うような構成になっている……。

建物は決して人を威圧するような高さではなく，樹木の張り出す枝の下に建物はある。淡い色調の色彩だけが建物を目立たせている。入口の位置が巧妙に置かれ，いつの間にか外から内へ誘導されてしまう。内部には小さな高低差，屈曲，出入り，湾曲があって，室内を歩く人々に足の裏から大地の存在を感じさせる。こういう感覚が安心感を誘い，安定感に繋がる。こうした水平感を一層刺激するのが，見上げた時の垂直感である。細い線で懸垂された照明器具，木製の連子格子，縦長プロポーションの窓や開口部である。天井面に届いた明窓からは針葉樹の針のような葉先を抜けてきた光がゆっくりと降り注いでくる……。

レイヴィスカの建築は，人間が地上に生存するための最も基本的なものを出発点として選びとったところにその本質があるのだ……。だからこそ，さまざまな状況を超えた普遍性を持つのだ……。(A+U.9504より)

(ユハ・レイヴィスカ氏は，1996年3月に行われる「フジタ・都市講座」の「設計ワークショップ」にユニットマスターの一人として来日します)

フジタ・都市講座を終えて

渡辺富雄

この3月をもって、「フジタ・都市講座」の1992、93年度の2年間のPart-1と94、95年度の2年間のPart-2、合計4年間の全てが終了する。終了に当たって、この講座の運営に関わった者の一人として、講座の概要と結果を簡単に紹介して若干の感想を述べてみたい。詳細については、報告書が「都市 Part-1」、「都市 Part-2」、そして「都市と環境」の三冊に纏められているので、そちらを参照していただきたい。

この講座は、(株)フジタからの基金をベースにして大学院理工学研究科に開講された「冠講座」で、建築家磯崎新氏をモデレーターとして運営され、大学院の中では「建築学特別講義」として組み込まれたものである。

Part-1では2年間にわたって、世界的建築家・理論家を招いて、それぞれ一般社会人を対象にしたオープンレクチャー1回と、学生を対象にした学内セミナー2回が行われた。招聘した建築家は順に、フランチェスコ・ダル・コオ（ベニス）、伊東豊雄（東京）、ホルヘ・シルベッティ（ボストン）、レオン・クリエ（ロンドン）、レム・クールハース（ロッテルダム）、ダニエル・リベスキント（ベルリン）、ラファエル・モネオ（マドリッド）、クリスチャン・ド・ボルザンバルク（パリ）、磯崎新（東京）、リカルド・レゴレッタ（メキシコシティ）、マイケル・ロットンディ（ロサンゼルス）、アルヴァロ・シザ（ポルト）の12氏である。オープンレクチャーでは合計5,300名（1回平均約500名）を越えるさまざまな分野からの聴講者があった。一方、学内セミナーは、計画系専攻のほとんどの大学院生、学部生、それに海洋建築、生産工学部の大学院生、フジタの聴講者等を加えて毎回30～50名の参加者があった。学内セミナーは、伊東氏のように短期間のデザインワークショップを行ってくれた方、またクールハース氏や磯崎氏のように質疑応答中心のものなど、トピックもスタイルもバラエティに富むものであった。また、講師の方々の来日に先だって大学院生を中心に日本人講師を招いた勉強会や、その後建築雑誌にレポートしたり、学生の自主的な、刺激的なスタイルで進めることができた。

Part-2では、「都市」をキーワードとして、ピータ

ー・クック（ロンドン）、ハンス・コルホフ（ベルリン）、バーナード・チュミ（ニューヨーク）、フランチェスコ・ヴェネツィア（ナポリ）、王 其亨（北京）、エンリック・ミラーレス（バルセロナ）の6名の建築家を招き、Part-1と同様の形式で行われた。Part-2では前回に比べて、講師に関する分厚いパンフレットを作成するなど、熱心に事前勉強が行われたように思う。

Part-2では、さらに幅を広げて、こうしたレクチャー形式の受動的なものだけでなく、設計行為という講師と学生の密接なコミュニケーションを通して、講師の建築理念を学ぶという考えから短期間のデザインワークショップが企画された。94年度には日本人若手建築家4名（内藤 廣、青木 淳、入江経一、衛藤信一の各氏）をユニットマスターとして「都市居住」をテーマに、他大学の学生も含めて行われた。95年度（96年3月9日～23日）には、ユハ・レイヴィスカ（フィンランド）、トム・ヘネガン（イギリス）、マニュエル・タルデツ（フランス）の外国人建築家3名を招いて同様のワークショップが行われる予定である。大学院生に限らず学部生も、またとない機会なので言葉の壁を恐れずぜひ参加していただきたい。2週間という短いワークショップで、アツという間に過ぎてしまうかもしれないが、考え方の違いや設計の進め方の違いなど、参加者にとって刺激的なものになると思うし、こうした経験は後でジワリと役立ってくるものだと思う。建築のスケッチはユニバーサル・ランゲージなのである。

もう一つの柱として、Part-2では「都市と環境」をテーマに14名の日本人専門家を招いてオムニバス形式で都市の環境問題に関するさまざまな講義をしていただいた。建築系の学生だけでなく、学科を越えて土木・物理・工業化学・電気などの学生が聴講した。

さて、今回の世界的に著名な建築家・理論家18名による「都市講座」は、テーマを見てもわかるように、都市・建築をめぐるさまざまな視点を提示してくれた。さまざまな国・地域、異なった社会背景の中で、今何が行われているか、私たちに新たなパースペクティブを与えてくれる極めて刺激的なものであった。

私自身はこの間、数名の講師の先生方を京都や奈良への小旅行の案内をしたり、また一方でニューヨークやニュージャージーそしてヴェローナ（イタリア）のデザインワークショップに参加したり、ASIAフォーラムに参加したりして、いろいろな建築家との交流や都市・建築を見る機会があった。今回来日された16名の外国人建築家を含めているような建築家を、その建築デザインの理念やプロセスという視点から見た時、いくつかのグループに分けられると思うが、私自身はどちらかという土着的あるいは地域的なアプローチをしている建築家、例えば、シザ、レゴレッタ、モネオ、ヴェネツィアなどに新鮮さを覚えた。これらの建築家は、もちろん自国以外にプロジェクトはあるが、ベースは自分自身の国・地域に深く根を下ろして活動を行っている。建築の成立する場所性から生まれるオリジナリティが、逆に世界に向か

連続公開講座「都市-II」を終えて

関係の建築化

人間が多様に関わることのできない日本の都市

1980～90年代、東京において大規模な資本投下がなされた結果、「優美な施設」はたくさん建設されたが、個人個人がしたいようにし、居たいように居ることのできる場所がなくなってしまったのではないかと、東京という都市が単なる物理的な都市施設の集積体になってしまったのではないかとという基本的な問題意識を抱き、私は連続公開講座「都市-II」に臨みました。

子供、老人、女性、男性、働いている人、遊びにきている人など、さまざまな属性の個人が、気兼ねなく安心して居れる場所、さまざまな状態で他の人々と都市構造と接触し都市を認識できる場所、人が多様に積極的に都市に関わることのできる場所を東京という都市に、どのようにつくっていけばいいのか、また、どのように布置していけばいいのか、その方法論を漠然と考えていました。

形態は機能に従わず、機能も形態に従わない

以上のような観点から「都市-II」を振り返れば、バーナード・チュミ氏による第3回公開講演会と学内セミナーで語られた「現代の建築は従来の機能や形態だけでは建築とならない、建築とは空間、イベント、動きが組み合わされて認識される」という主張が一番印象に残っています。

Event-Cities, Architecture and Politics, Movement and Event, のテーマで展開された計3回のレクチャーは、よく知られている「クロスプログラミング」「トランスプログラミング」「ディスプログラミング」の3つ



都市講座Part-1閉講式。受講者全員と

って説得性・普遍性を持つように思えた。ナショナルであればナショナルであるほど、インターナショナルであるということであろうか？

関係された方々にお礼を申し上げて結びとします。

（助手）

星野 収

のプログラミング理論に、「ディソシエーション」「ディスジャンクション」という概念を加え、機能ごとに振り分けられた空間を合目的に配置するモダニズムの建築を否定し、建築の周囲や内部で喚起されるイベント、ムーブメント、プログラムを重視し、これらから建築を派生させていくというアイデアが含まれていたと私自身考えています。

具体的な視点と具体的な意味

「都市-II」に参加することによって得た私自身の成果は、人がさまざまな形で都市に関わることのできる場所の創出法を考える場合、場所と周囲の環境に対して常に具体的な視点の必要性を理解できたことです。チュミ氏の理論は、建築形態や場所等の都市の具体的なエレメントの考察によって生まれたものだと考えます。「都市-II」を聴講する以前の私の都市東京に対する視点は、マクロなスケールをもつ都市のエレメントや都市の記号的、現象的な側面に集中していたと考えています。

「都市-II」で6人の建築家によって語られた内容は、個々にテーマは異なっていましたが、現代にふさわしい都市のイメージはどのようなものか、それはどのように認識されるのか、その中で建築の担う役割はどのようなものか、というほぼ共通のストーリーで展開されたと考えています。

私は、「関係の建築化」というイメージを下敷きに、具体的な視点で現代の都市をみていきたいと考えています。

（助手）

私自身はこの間、数名の講師の先生方を京都や奈良への小旅行の案内をしたり、また一方でニューヨークやニュージャージーそしてヴェローナ（イタリア）のデザインワークショップに参加したり、ASIAフォーラムに参加したりして、いろいろな建築家との交流や都市・建築を見る機会があった。今回来日された16名の外国人建築家を含めているような建築家を、その建築デザインの理念やプロセスという視点から見た時、いくつかのグループに分けられると思うが、私自身はどちらかという土着的あるいは地域的なアプローチをしている建築家、例えば、シザ、レゴレッタ、モネオ、ヴェネツィアなどに新鮮さを覚えた。これらの建築家は、もちろん自国以外にプロジェクトはあるが、ベースは自分自身の国・地域に深く根を下ろして活動を行っている。建築の成立する場所性から生まれるオリジナリティが、逆に世界に向か

連続公開講座「都市-II」を終えて

関係の建築化

人間が多様に関わることのできない日本の都市

1980～90年代、東京において大規模な資本投下がなされた結果、「優美な施設」はたくさん建設されたが、個人個人がしたいようにし、居たいように居ることのできる場所がなくなってしまったのではないかと、東京という都市が単なる物理的な都市施設の集積体になってしまったのではないかとという基本的な問題意識を抱き、私は連続公開講座「都市-II」に臨みました。

子供、老人、女性、男性、働いている人、遊びにきている人など、さまざまな属性の個人が、気兼ねなく安心して居れる場所、さまざまな状態で他の人々と都市構造と接触し都市を認識できる場所、人が多様に積極的に都市に関わることのできる場所を東京という都市に、どのようにつくっていけばいいのか、また、どのように布置していけばいいのか、その方法論を漠然と考えていました。

形態は機能に従わず、機能も形態に従わない

以上のような観点から「都市-II」を振り返れば、バーナード・チュミ氏による第3回公開講演会と学内セミナーで語られた「現代の建築は従来の機能や形態だけでは建築とならない、建築とは空間、イベント、動きが組み合わされて認識される」という主張が一番印象に残っています。

Event-Cities, Architecture and Politics, Movement and Event, のテーマで展開された計3回のレクチャーは、よく知られている「クロスプログラミング」「トランスプログラミング」「ディスプログラミング」の3つ



都市講座Part-1閉講式。受講者全員と

って説得性・普遍性を持つように思えた。ナショナルであればナショナルであるほど、インターナショナルであるということであろうか？

関係された方々にお礼を申し上げて結びとします。

（助手）

星野 収

のプログラミング理論に、「ディソシエーション」「ディスジャンクション」という概念を加え、機能ごとに振り分けられた空間を合目的に配置するモダニズムの建築を否定し、建築の周囲や内部で喚起されるイベント、ムーブメント、プログラムを重視し、これらから建築を派生させていくというアイデアが含まれていたと私自身考えています。

具体的な視点と具体的な意味

「都市-II」に参加することによって得た私自身の成果は、人がさまざまな形で都市に関わることのできる場所の創出法を考える場合、場所と周囲の環境に対して常に具体的な視点の必要性を理解できたことです。チュミ氏の理論は、建築形態や場所等の都市の具体的なエレメントの考察によって生まれたものだと考えます。「都市-II」を聴講する以前の私の都市東京に対する視点は、マクロなスケールをもつ都市のエレメントや都市の記号的、現象的な側面に集中していたと考えています。

「都市-II」で6人の建築家によって語られた内容は、個々にテーマは異なっていましたが、現代にふさわしい都市のイメージはどのようなものか、それはどのように認識されるのか、その中で建築の担う役割はどのようなものか、というほぼ共通のストーリーで展開されたと考えています。

私は、「関係の建築化」というイメージを下敷きに、具体的な視点で現代の都市をみていきたいと考えています。

（助手）



パラディオのロトンダ（ビツェンツァ）の前で

イタリアの風の中で

第7回U.S.A Seminar in Veronaに参加して

新井健太

猛暑といわれた昨年の夏が本格化する前の1995年7月14日より5週間、イタリアのベローナにて米国のブラッツ大学のリビオ・ドミトリユ氏が主催するU.S.A (Urban Studies and Architecture) Seminarに参加する機会を得ることができました。このセミナーは欧州において今回で第7回を迎え、イタリア、ドイツ、コロンビア、韓国など世界各国の学生、実務経験者のあわせて40人ほどが参加して開催されました。今回はテーマ「人工の楽園」と題され、主に「設計」と「講義」の二本の柱で進められました。

このセミナーを通して行われた講義は、ベローナの歴史的背景を中心に、特にマテリアル（大理石、御影石、鉄、ガラス）に注目し、それらを通して建築・アーバンデザイン・歴史・理論・素材について考察、スタジオの中だけでなく、実際に街を歩き、手で触れ、肌で感じることで学習していくことがその主旨でした。

セミナーの主なスケジュールは、スタジオでの創作活動の他に、大理石の採石現場、人工大理石の製造工場、彫刻家ピノ・カスターニヤ氏のアトリエ、さらにベニス、ピチェンツァなどの北イタリアの都市・集落、カルロ・スカルバの作品、スロベニア(旧ユーゴ)のリュブリアナにおけるプレチェニクの作品等々、短期間のうちに集中してさまざまなものを見学することができました。

そして、上記のような見学とレクチャーの基礎学習をもとに設計は行われました。今回はベローナ市内3箇所の敷地が与えられ、その内一つを選択し、「人工の楽園」を計画するというものでありました。このセミナーのシステムは、基本的に敷地ごとに3つのユニットに分か



建築見学会（カルロ・スカルバの作品についてのレクチャー）

れ、それぞれ講師がつき、入れ替わり訪れる建築家から指導を受ける方法で行われました。

以上の体制が取れましたが、日本とは異なる環境のためか、設計を進める上でのさまざまな差異に気付き、戸惑わされました。

まず、想像していた以上に、土地を読み込むというプロセスに多くの時間を費やさなければなりませんでした。歴史、素材に関する講義、敷地見学が多く、あまりの長さに少々飽きるぐらいでした。そして、文字、色彩を一切使わない図面でのプレゼンテーションも義務づけられました。また、特に今回は他国の学生との3人一組の共同設計チームを組むことになり、私のチームはコロンビアと韓国の学生の、バックグラウンドの異なる3人で一つの作品を仕上げることになりました。これはコミュニケーションの難しさだけでなく、建築設計の進め方や考え方の違いにおいて、衝突や誤解を生みました。余談ですが、その後残念なことに、私のチームの韓国の人が意見の違いがもとで離れてしまうということがありました。

普段の生活はというと、このセミナーのスケジュールは基本的にスタジオとホテルの往復で1日が終わり、これが日程の約半分で、あとは旅行、見学で埋められていました。宿泊先となったホテルは、ベローナの市街から1時間ほど離れたガルダ湖畔にあり、少々不便（田舎）ではありましたが、素晴らしいロケーションの所でした。残念なことに、日程中に休日はほとんどなく、われわれはリゾート気分を満喫することはあまりありませんでした。しかし、「監禁状態」だったなかでも、ホテル

での生活は楽しいものでした。特に、テラスに仕切りがなく、そこを使って自由に部屋を行き交うことができた(?)ので、隔離された共同生活のなかで、友人をつくりやすかったように思います。スイスの友人と夜中までワインを片手にお互いの国の文化や哲学について話し合ったということもありました。

最後に、旅行はどんな形であれ、素晴らしい経験を与えてくれるように思います。しかし、ただなんとなくの名所めぐりを繰り返すよりは、海外の風に吹かれながら物思いに耽るということも(建築というフィールドに限らず)、大切なように思います。また、その結果、自分のなかに拠り所となるものができれば、それは更なる喜びであると考えます。

特に、同じ時間のなかで同じ課題について考え、締め切り前には徹夜もした共通の経験を通して得た友人は、私にとって何よりの収穫であったように思います。クリスマスには、コロンビアの友人からカードとプレゼントが送られてきました。

なお、このセミナーには、渡辺富雄助手がファカルティメンバーの一人として、また高橋正明君(関沢研 M-1)と石鍋壮史君(若色研 M-1)も参加しました。

(関沢研 M-1)



最終審査風景



スタジオ風景

フジタ・都市講座 設計ワークショップの参加者募集

以下の要領で1995年度の「フジタ・都市講座」の「設計ワークショップ」が行われます。スタジオでのコミュニケーションは原則として英語で行われますが、ヘネガン氏とタルデッツ氏は日本語もできます。意欲ある学生は、学部・大学院に関わらずトライして下さい。

テーマ：都市に関連したテーマが、各ユニットごとに出来ます。

ユニットマスター：ユハ・レイヴィスカ(ヘルシンキ在住・フィンランドの建築家)

トム・ヘネガン(東京在住・イギリスの建築家)

マヌエル・タルデッツ(東京在住・フランスの建築家)

ゲストクリテック：高宮真介 山本理顕

参加者：建築学科に所属する大学生および大学院生、建築設計やデザインの仕事に関わっている人で、テーマに対する積極的な提案を行える人。

参加人数：各ユニット5～8名。合計24名程度。

日時：1996年3月9日(土)～3月23日(土)

3月9日(土)：全体ガイダンス、ユニット申し込み、エスキース選考

3月23日(土)：講評会

会場：駿河台校舎5号館5階製図室

参加費：無料

応募方法：氏名、住所、年齢、所属(学部名学年)、連絡先電話番号を記入して、「都市講座」事務室に申し込んで下さい。

応募締切：1996年3月1日(金)到着分をもって締切とします。

問い合わせ：日本大学理工学部「都市講座」事務室

〒101 東京都千代田区神田駿河台1-8 TEL：03-3259-0998 FAX：03-3293-0150

第27回 建築学生 海外研修旅行 報告

Aコース

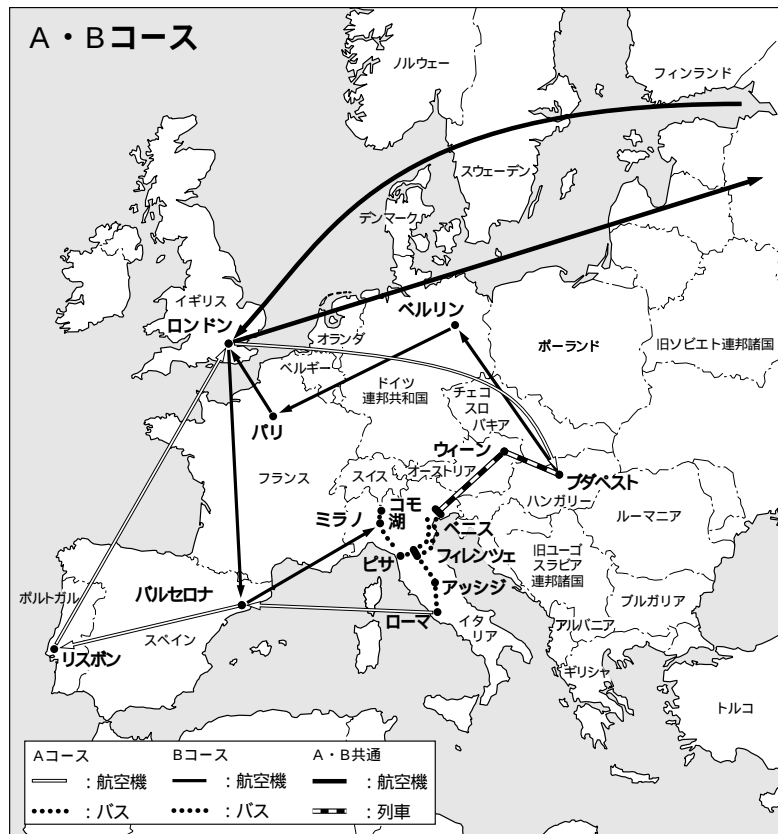
平成7年8月25日～9月16日

引率：石丸辰治教授
渡辺富雄助手

Bコース

平成7年8月26日～9月17日

引率：本杉省三助教授
蜂巢浩生助手



Aコース

異常寒気の中でのヨーロッパ研修旅行

渡辺富雄

Aコースは、1995年8月25日から9月16日までの23日間、ロンドン・ウィーン・ブダペスト・ベニス・フィレンツェ・ローマ・バルセロナ・リスボンの8都市を巡ってきた。引率は石丸辰治先生と私。参加者は建築学科の3年生32名、2年生4名、院生1名、そして添乗員を含めて総勢39名。その内、約半数の19名が女性という華やかメンバーであった。建築の歴史を現代から古代へと逆戻りするような順序で諸都市を巡り、最後は港町リスボンでゆっくりと旅の疲れを癒してきた。

海外旅行というと、欲張ってハードなスケジュールになりがちだが、今回は一つの都市で最低丸一日の自由時間が取れるように比較的ゆったりした日程であった。当初の心配とは裏腹に、それぞれのグループが自主的に地

図を片手に町に出かけ、そのことが逆に一人一人にとって思い出深い旅を体験することができたのではないだろうか。

ミラノでは、ストのため乗り継ぎの飛行機が遅れ、搭乗を繰り返すうちに、メンバーの何人かを飛行場に残したまま離陸するのではないかという、引率側としては唯一ヒヤリとする場面があったが、タラップで人数を確認して、無事バルセロナへ向け離陸。

圧倒的な都市や建築との出会い……。真冬のような寒さ……。ジブシーに襲われそうになったり、物をなくしたり……。体調を崩したり……。さまざまな思い出を残して、無事終了することができた。

(助手)



ロンドンの ハイツ建築に触れて

八木 崇（3年）

私は歴史的建築より、どちらかと言うと、新しい、特にハイツな建築が好きなので、その建物についてのことがとても印象に残っている。ロンドンは、特にそれらの建物が集中していて感動的であった。ロンドンの市内や、少し足を延ばすだけで、世界的に有名な建築家のハイツ建築に逢える。N.フォスター、P.ロジャース、J.スターリングなど、感動の嵐である。

ロンドン市内にある「チャンネル・4」。これはP.ロジャースの作品であるが、ロビーのガラスの壁が建物を訪れる者を驚かせる。習志野校舎にある先端科学センターのロビーに似ている。サッシュがなく、ワイヤーで張力を与えてガラスを支えている。その壁面は軽い感じで仕上げられていて、涼しげなイメージのロビーであった。

もう一つ印象的な建物をあげれば、市内の中心にあるウォータールー国際駅（設計：N.グリムショー）である。構造的には簡単に言うと、3ピンアーチになっているのだが、アーチ部がハイブリッドになっているとても興味深かった。ケンブリッジに発つ前に見た巨大な鉄骨構造のセントパンクラス駅舎（1867年）を見たとき、産業革命とその後の鉄の大量生産と建築への応用といったイギリスの建築の、現代のハ



ウォータールー国際駅

イツ建築に繋がるルーツを見たような気がした。

ロンドンに限定した内容になってしまったが、ヨーロッパには日本ではまだ見られないような、歴史的建築と新しい建物の共存の形をたくさん見ることができた。とても有意義な旅行であった。

美しい町 ウィーンと オットー・ワーグナー

水野純也（3年）

イギリスのロンドンから始まり、ポルトガルのリスボンまでの23日間、さまざまな国やその習慣に接してきたが、私にとって、その中で最も洗練されていて美しい町だと感じたのはウィーンである。

われわれが滞在したのは8月下旬であったが、10月を下回っており、空も毎日曇っていたが、この曇り空が妙にウィーンの町並みに似合っており、落ち着いた雰囲気を出していた。そんな中、ウィーンの近代建築家の一人と言えばオットー・ワーグナーということで、ワーグナーの作品を可能な限り見て回った。

時には迷いもしたが、地下鉄が非常にわかりやすく、第一、第二のピツラ、カールス・ブラッツ駅、マジョリカ・ハウス、シュタインホーフ教会、カイザーバードの水門監視所等を見たが、その中でも最も良かったのはウィーンの郵便貯金局であった。遠くから見る限りは周囲の建物と協調しておりそれほど特徴は感じられないが、近くで見るとさまざまなディテールが施されており、興味深かった。例えば、外壁は一枚一枚の石がボルトでとめられているような表現になっており、周囲の重い石の建築とは異なった非常に軽い近代的な雰囲気を出していた。また内部はさらに素晴らしく、明るいアトリウムやガラスブロックの床、



郵便貯金局（ウィーン）

アルミ板のボルト締めディテールなど非常に凝ったもので、とても1904年に造られた物とは思えないほどの錯覚を感じた。

私はワーグナーの建築の本当の凄さは、他の建築（町並みなど）と合わせながらも、自分の建築の個性を上手に出していることだと思った。第一のピツラ（1989年）と第二のピツラ（1913年）はまったく異なった印象であり、第一のピツラは言わば古典的なスタイル、第二のピツラは近代的なスタイルである。このわずか二十数年の間の近代建築黎明期に、一人の建築家がさまざまなスタイルを変えて、近代建築のヴォキャブラリーにつながるさまざまな試みがなされていることが大変興味深かった。

初めてのヨーロッパ

山口智美（3年）

私にとって初のヨーロッパ。見る物すべてが新鮮で、そのスケールの大きさに圧倒されっぱなし。23日間という、長いようで短い時間の中で、少しでも多くの建物を見ようと一日中歩き回り、筋肉痛になったものでした。

8都市を回り、それぞれにいろんな思い出がありますが、私にとって一番印象的だった都市は、なんと言ってもバルセロナ。その、言葉では言い表せないほどの青い空は、さすがは情熱の国という感じで、今も目に焼き付いています。そして、ガウディ



バルセロナバピリオン

の数々の建築や、ミースのパルセロナパビリオンを自分の目で見られたこと。貴重な体験ということであれば、パルセロナの最前線で活躍しているエンリック・ミラーレス氏の事務所を訪れられたこと。個人ではとても行けない所なので、この研修旅行に参加して良かったと思いました。そこには日本の建築事務所とは違い、とても自由で自然な空間で、そこでなら、いい物がじっくりつくり出せそうな印象を受けました。そしてそこでは、いろんな国の、私たちと同じくらいの歳の人達が働いていて、世界の広さを実感しました。

言い出せばきりがありませんが、一日中買い物をしたり、迷子になったり、ジブシーに狙われたことも含めて、この23日間に見たり感じたりしたことは、きっと一生の宝だと思います。

教会建築を通して

飯部政光（3年）

ウエストミンスター大聖堂の正面入口を入ると、いきなり目の前に大きな空間が開けてくる。見上げれば、何十メートルもの高さが吹き抜けになっている。厳肅な雰囲気の中で、空気も冷たく感じる。内部空間は、薄暗く、弱々しい光がこぼれ落ちている。まるで人間の弱さを照らし出しているようだ。やがて、どこからともなくパイプオルガンの音色が聞こえてくる。それが体中を突き抜けていく。そこには、ただ呆然とした自分がいた。（ウエストミンスター大聖堂より）

黄金で装飾されたサンピエトロ寺院。黒、白、灰色で内部空間が彩色された聖シュテファン寺院などなど……。私たちの旅行は

この美しい教会の数々を巡る旅でもあった。ヨーロッパの都市には、どんな小さな町でも必ずといってよいほどその中心には、長い歴史を持つ教会がある。そして、町や都市は教会を中心にして発展し、その骨格が形づくられている。教会はこうした物理的な中心でもあり、またヨーロッパの人々の生活の中心、精神の中心でもあった。そこには何とも言えない空間の重みや歴史、その建築に込められた人々の魂を感じる。訪れる都市ごとに、こうした素晴らしい教会や、今も息づいている長い歴史を持つさまざまな建築に数多く巡り合うことができた。ヨーロッパ建築の古き良き建築との出会いを通して、私は、歴史的な古い建築の保存も含めて、すでに建っている建築と、これから建てられる新しい建築との関係をもっと考えていくべきだと痛感した。

Bコース

足を棒にして丸ごと味わった建築と文化

本杉省三

学生との旅行は楽しいものだが、もし事故が起きたらという心配がつきまとって、それがつい臆病な行動になる。しかし、建築を見るときは誰もが非常に熱心で、覇気が感じられず僕らをイライラさせる普通の授業とは打って変わって、こちらの心配を吹き飛ばしてくれた。

例えば、湖と山に囲まれた風光明媚なコモでは、少しゆっくりしようと意図していたのだが、それまでの勢いをかって一日中買い物もできないくらい歩き回り、それこそ足が棒になってしまった。数人の学生たちとテラーニを始めとした近代建築を見て歩いた後、ルガーノまでさらにM・ボッタラ近現代の建築を見に足を伸ばすと、別の学生も来ていたりという具合で熱心さが感じられ、こうした様子が多少後半に疲れが出て弱まったものの、3週間にわたって続いたことは、それをしかけた者にとって気持ちの良いものだった。

また、単に建築や都市を見て回るだけでなく、その国の文化全体を感じとるために、いろいろなものに触れることの楽しさも味わってくれたように思う。サクラダファミリア教会の後、闘牛に出かけたり、ブタペストの音楽アカデミー内の



コンサートホールで音楽を聴いたり、「切符を分けて下さい」という札を持って入り口に立って、ようやく聴いたベルリン・フィルハーモニーなど、学生たちには楽しい経験だったと思う。

こうした共通の時間と行動の中から、新しい友情や、建築や都市への問題意識が芽生えてくれたら幸いである。私も、学生に負けず自由時間を利用して友人と久しぶりに会ったり、オペラやコンサートに楽しい時間を過ごさせてもらった。

（助教授）



もう一度 行きたい場所は ドイツです

阿部隆志（3年）

どの土地へ行ってもまずしたことと言えば、地図を手に入れることでした。ガイドブックを日本から用意してこない、ものぐさな僕にはとても大切なことでした。地図がなければ、建物を見ることも、食事をすることもできない。目的地を確認することができないからです。

不思議なことにヨーロッパには「information」が街のところどころにあり、そこへ行けば街の地図がただで手に入りました。さらに驚くのは、建築物を見て歩く人のための地図を用意している街があったことです。

それぞれの街の地図を見ながら実際に歩いているうちに気が付いてくるもので、行く先を知るだけの道具は、他にもいろいろと教えてくれていました。どんなに細く短い通りにでも一つ一つ名前が付いている、通りの構成は碁盤の目ではない、大きな教会堂があって広場がある、勝利を祝い兵士た

ちが凱旋したと思われる広い道路、人々を自由な空気で包み込んだ都市を外敵から守っていた城壁が今では跡地を車道、線路として利用されている。

日本の文化とその成り立ちが、欧州のものと見た目にも違うのは明らかなことです。しかし、地図のこと、道を歩く人に建物の場所を尋ねるとほとんどの方が正確に教えてくれたことを考えると、建築への接し方に余裕を感じられ、羨ましく思えました。教会堂でお祈りをする人は、建物の中に身を置くことも楽しんでいるようでした。

余裕のない人には、余計なものは必要ありません。旅先でそう言われ続けていたように思います。

さまざまな文化に触れて

中川洋輔（M-1）

バルセロナから始まりパリで終わった今回の研修旅行は、23日をかけて実にさまざまな都市を見て回ることができました。旅行の後半は少し疲れましたが、どの国も初めてということもあり、最後まで楽しむことができました。しかし、各都市の滞在期間が3、4日と短いめか、どの都市も少し消化不良といった感じを受けました。

しかし、今回の旅行では、どんなに小さい町でも古い歴史を感じることができ、また、それぞれの都市が特徴を持っていることも大変興味深いことでした。特にそれを顕著に感じたのが、イタリアを見て回ったときでした。ミラノは経済や商業の中心地の街、フィレンツェは富豪たちが庶民を利用しながら共存して繁栄させた街、ヴェネツィアは貴族や豪商などの特権階級だけの街、といったように、同じイタリアでありながら歴史、文化の違いを感じることができました。また、建物などは、街の景観を損なわないように建てられており、過去との時間の継続を感じることができたと思いました。

また、イタリア、フランス、スペインなど、まだ見たい建物が多くあるため、今度訪れるときはもっと時間をかけ、その国の歴史文化を十分把握して、多くの建物を見たいと思います。



建築系3学部・短大教員交流会 郡山セミナー報告

平成7年度の建築系教員交流会が去る11月17日（金）に郡山の工学部で開催された。建築教室から若色教授、半貴教授、安達助教授、橋本助手、岡田助手、短大から横山教授、内藤専任講師が出席した。早朝から親睦ゴルフ会、三春地区見学会等の企画があり、午後、本館会議室で「建築実験教育」をテーマに、各キャンパスでの実状が報告され、質疑討論が行われた。

実験の実施にあたっては、大学院生のサポートが不可欠という点はいずれも同じであり、少人数教育への工夫に各学部の個性がみられた。工学部、生産工学部ともに建築実験は2～4年次に設置しており、建築教育のまとめの段階で積極的に実験・実習を他の教科と組み合わせる試みが行われていて興味深かった。

生産工学部で本年度から試行している「プロジェクト科目」は、一つのテーマを設定して企画→計画→調査→実験→製作を総合的にグループ学習させるもので、3年次後期と4年次に設置されている。それぞれ1グループ4～5名編成で定員が30名、学生はかなり厳しい受講条件をクリアする必要がある。3年次後期の今年のテーマは「木の部材を使ったスペース・ストラクチャーによるシェルター」、担当教員は4名で

ある。週2回、計11週をかけて実構造モデルを完成させ、合格すると企画設計演習（2単位）と建築実験（4単位→通年科目なので前期の実験全てに合格していることが受講の前提条件）が認定される。4年次のテーマは「屋根つきサッカースタジアムの設計」。担当教員3名で、本年は3班14名で実施した。これによって修得できる複合領域科目は、建築特論（前期2単位）、特別設計（前期2単位）、建築実験（通年2単位）である。

工学部では、4年次前期設置の建築実験（1単位）の内容を構造実験（3項目；土、R.C.梁、振動の内から1項目選択）と計画実験（7項目；温湿度、室内気候、照度、防災、人間環境 人体と色彩、木材、空間認知の内から2項目選択）に分けて学生の選択肢を増している。ただし、選択項目が少ないかわりに密度の高い内容となっているようだ。

また、コンピュータリテラシーや測量を「実験」の1項目として組み込んでいる学部もあり、多様な建築専門領域のカリキュラム上の位置づけに各学科の個性が見られた。海洋建築工学科からは、ユニークな海洋実習の様子も紹介された。



もう一度 行きたい場所は ドイツです

阿部隆志（3年）

どの土地へ行ってもまずしたことと言えば、地図を手に入れることでした。ガイドブックを日本から用意してこない、ものぐさな僕にはとても大切なことでした。地図がなければ、建物を見ることも、食事をすることもできない。目的地を確認することができないからです。

不思議なことにヨーロッパには「information」が街のところどころにあり、そこへ行けば街の地図がただで手に入りました。さらに驚くのは、建築物を見て歩く人のための地図を用意している街があったことです。

それぞれの街の地図を見ながら実際に歩いているうちに気が付いてくるもので、行く先を知るだけの道具は、他にもいろいろと教えてくれていました。どんなに細く短い通りにでも一つ一つ名前が付いている、通りの構成は碁盤の目ではない、大きな教会堂があって広場がある、勝利を祝い兵士た

ちが凱旋したと思われる広い道路、人々を自由な空気で包み込んだ都市を外敵から守っていた城壁が今では跡地を車道、線路として利用されている。

日本の文化とその成り立ちが、欧州のものと見た目にも違うのは明らかなことです。しかし、地図のこと、道を歩く人に建物の場所を尋ねるとほとんどの方が正確に教えてくれたことを考えると、建築への接し方に余裕を感じられ、羨ましく思えました。教会堂でお祈りをする人は、建物の中に身を置くことも楽しんでいるようでした。

余裕のない人には、余計なものは必要ありません。旅先でそう言われ続けていたように思います。

さまざまな文化に触れて

中川洋輔（M-1）

バルセロナから始まりパリで終わった今回の研修旅行は、23日をかけて実にさまざまな都市を見て回ることができました。旅行の後半は少し疲れましたが、どの国も初めてということもあり、最後まで楽しむことができました。しかし、各都市の滞在期間が3、4日と短いめか、どの都市も少し消化不良といった感じを受けました。

しかし、今回の旅行では、どんなに小さい町でも古い歴史を感じることができ、また、それぞれの都市が特徴を持っていることも大変興味深いことでした。特にそれを顕著に感じたのが、イタリアを見て回ったときでした。ミラノは経済や商業の中心地の街、フィレンツェは富豪たちが庶民を利用しながら共存して繁栄させた街、ヴェネツィアは貴族や豪商などの特権階級だけの街、といったように、同じイタリアでありながら歴史、文化の違いを感じることができました。また、建物などは、街の景観を損なわないように建てられており、過去との時間の継続を感じることができたと思いました。

また、イタリア、フランス、スペインなど、まだ見たい建物が多くあるため、今度訪れるときはもっと時間をかけ、その国の歴史文化を十分に把握して、多くの建物を見たいと思います。



建築系3学部・短大教員交流会 郡山セミナー報告

平成7年度の建築系教員交流会が去る11月17日（金）に郡山の工学部で開催された。建築教室から若色教授、半貴教授、安達助教授、橋本助手、岡田助手、短大から横山教授、内藤専任講師が出席した。早朝から親睦ゴルフ会、三春地区見学会等の企画があり、午後、本館会議室で「建築実験教育」をテーマに、各キャンパスでの実状が報告され、質疑討論が行われた。

実験の実施にあたっては、大学院生のサポートが不可欠という点はいずれも同じであり、少人数教育への工夫に各学部の個性がみられた。工学部、生産工学部ともに建築実験は2～4年次に設置しており、建築教育のまとめの段階で積極的に実験・実習を他の教科と組み合わせる試みが行われていて興味深かった。

生産工学部で本年度から試行している「プロジェクト科目」は、一つのテーマを設定して企画→計画→調査→実験→製作を総合的にグループ学習させるもので、3年次後期と4年次に設置されている。それぞれ1グループ4～5名編成で定員が30名、学生はかなり厳しい受講条件をクリアする必要がある。3年次後期の今年のテーマは「木の部材を使ったスペース・ストラクチャーによるシェルター」、担当教員は4名で

ある。週2回、計11週をかけて実構造モデルを完成させ、合格すると企画設計演習（2単位）と建築実験（4単位→通年科目なので前期の実験全てに合格していることが受講の前提条件）が認定される。4年次のテーマは「屋根つきサッカースタジアムの設計」。担当教員3名で、本年は3班14名で実施した。これによって修得できる複合領域科目は、建築特論（前期2単位）、特別設計（前期2単位）、建築実験（通年2単位）である。

工学部では、4年次前期設置の建築実験（1単位）の内容を構造実験（3項目；土、R.C.梁、振動の内から1項目選択）と計画実験（7項目；温湿度、室内気候、照度、防災、人間環境 人体と色彩、木材、空間認知の内から2項目選択）に分けて学生の選択肢を増している。ただし、選択項目が少ないかわりに密度の高い内容となっているようだ。

また、コンピュータリテラシーや測量を「実験」の1項目として組み込んでいる学部もあり、多様な建築専門領域のカリキュラム上の位置づけに各学科の個性が見られた。海洋建築工学科からは、ユニークな海洋実習の様子も紹介された。

卒業研究着手について

3年生までは、建築の基礎を幅広く、しっかりと勉強し、あまり早急に専門分化しない方がよいとわれわれは考えています。しかし、大学生活の最後を迎える4年生は、各研究室に所属して、何か一つのテーマに取り組んでみるとともに、先生方と膝を交えて話し合い、就職や大学院への進学相談、大学院生との交流などを通して、教室では望めない人間的なふれあいと相互のコミュニケーションを得ることによって、大学生活の最も有意義な思い出が作り出されるものと考えています。

3年生諸君は4月からの卒業研究着手に向けて、以下のような各研究室の卒業研究テーマや、1995年4月の『駿建』にのっている昨年度の卒業生の就職動向などに目を通して、自分が4年生になって、やってみたいことを、よく考えておくことを希望します。

木村 翔（建築学科教室主任）

平成8年度卒業研究テーマ一覧

以下の研究テーマは、建築学、企画経営両コースの学生が自由に選択することができる。（計：計画系、構：構造系、50音順）

構———石丸辰治教授・新谷隆弘助手（454号室）

■卒業研究テーマ

1. エネルギー論に基づく対地

震設計法の構築

2. 制振構造の実用化に関する研究



大地震や大台風によって構造物が崩壊し、人命を危機に晒すようなことがあってはならない。これは建築基準法の要求する最低限の構造性能である。しかしながら、高度に発達してきた現代社会は、直接的被害よりも2次災害の影響が非常に大きくなりつつある。

たとえば、倒壊は免れ生存できたとしても、多くの個人財産が失われると同時に、公的機関や銀行や保険会社のコンピュータ・システムは故障し、職場も情報網の被害を受けて営業の一時停止、果ては社会全体としての商業活動の停止などが予想される。あるいは地震で怪我をしていても、病院も被害を受け機能を果たさず、逃げ出そうにも情報網や交通網はズタズタで、わずかに残った鉄道や道路は大混雑など、パニックに近い状況が予想されるのである。

関東大地震クラスの地震が首都圏を襲えば、こんな状態が最低1週間は続き、元通りの社会生活が営めるようになるには、数か月～数年を要するとも言われている。

こんな悲惨な2次災害を何とか避けたいという社会的要求が、免震・制振構造の創造をもたらしたと言える。従来の構造物とは設計思想を異にするこれらの構造物に対する設計体系や、それを支えるデバイスの開発が当研究室のメイン・テーマであり、その目的はライフサイ

クルの長い建築構造環境の改善にある。

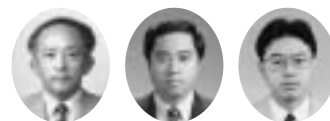
■卒業生の就職傾向

大手ゼネコンの現場・構造設計部・技術開発部・技術研究所等への就職が多い。また、官公庁・建設コンサルタント会社・コンピュータ関連会社、あるいは、鉄道・電力会社の建築部門に就職する者も増えつつある。

構———榎並 昭教授・安達俊夫助教授
・山田雅一助手（433-A号室）

■卒業研究テーマ

本研究室は、建築に関連する地盤工学および基礎構



造を主な研究対象としている。平成8年度の卒業研究は、次の5つのテーマを計画している。

1. RC基礎梁の耐力と変形状に関する研究

高層建築物の建設過程を想定し、長期あるいは中期荷重に対する鉄筋コンクリート基礎梁（地中梁）の耐力と変形状について実験的に検討する。

2. 地盤系オンライン地震応答実験に関する研究

地盤の地震時挙動を再現するため、コンピュータによる数値計算と中空ねじりせん断試験装置による動的実験をオンラインで結合して応答解析を進める地震応答実験システムの開発研究を行う。

3. 砂地盤の液状化特性に関する研究

液状化特性に与える地震動の不規則性の影響と液状化発生時の地震動の強さについて、オンライン地震応答実験法により検討する。

4. 地盤の非線形挙動に関する研究

地震時の地盤の非線形挙動を把握するために、土の非線形モデルとパラメータ同定法について検討し、非線形挙動の数値シミュレーションを行う。

5. 習志野キャンパスの地中地震観測に関する研究

習志野キャンパスの地盤の振動特性を把握するため、

キャンパス内の地中地震観測地点で得られた観測地震波について解析的に検討する。

上記テーマの他に、地盤工学と基礎構造の基礎的な知識を理解するために、建築学会の「建築基礎構造設計指針」等をテキストにして輪講形式のゼミを予定している。

■卒業生の就職傾向

卒研生の就職先は、他の研究室と同様に建設業と住宅産業が大半である。ここ数年の大学院生は東京電力の建設部、大手建設会社の技術研究所や構造設計部、東京都庁の建設局等に就職している。

なお、当研究室を窓口として、海洋建築工学科の西村敏雄教授、神園勝彦講師（駿331号室、習236-B号室）によるゼミを受けることができる。テーマは次のとおり。

■研究内容

シェル構造を中心とした大スパン構造物に関する研究が主体であり、現在は媒体（水・空気・地盤）との相互作用問題、動的安定問題、振動問題、材料非線形問題等に理論・解析・実験の各面より取り組んでいます。

■卒業研究テーマ

1. 離散化手法による構造物の振動解析
2. 構造物と媒体との相互作用問題に関する研究
3. 水中におけるシェル構造物の振動実験

【構】——岡村武士助教授（946号室）

習志野校舎大型構造物試験棟に建築学科教室より出向して運営と指導にあたっているため、習志野キャンパスにも研究スペースがある。豊富な設備と比較的ゆったりしたスペースで、自由に研究できるのが本研究室の特徴。本年度に予定している研究テーマは次の通り。積極的にテーマに取り組む学生を期待している。

1. 建築構造工学に関する研究

構造Form—A. ガウディ & Pyramid

2. 実験設計の評価に関する研究—大型構造物試験棟における実験研究の事例を通して—

このほか、具体的な研究テーマを持っている学生の相談に応じる。

【計】——片桐正夫助教授・大川三雄助手（587-A・B号室）

大原則は、各自がすでに興味ある研究テーマを提起することを歓迎するが、参考までに、これまでの研究事例と、当研究室が今取り組んでいる課題をあげておく。この中より選択、研究に参加することも認めている。

1. 「日本建築の伝統を考える」研究（例えば、インテ

リア、意匠、住い方などを対象として）

2. 近世社寺建築の計画、意匠、技術の調査研究（日本の建築の近代化へのメカニズムを解明）
3. 歴史的建造物、町並み、環境の保存に関する実践的研究（特に、活用の具体的提案について）
4. 近代の市街地住宅および宅地開発の発展経過と形態に関する調査研究
5. 東南アジア（特に、アンコール・ワット、ヴェトナム チャンパ遺構）のフィールド・ワークと調査研究
6. 古代から近代まで日本と深くかかわりのある中国、朝鮮の建築に関する調査と研究

自主的に研究をすすめる意志と行動力のある人物が望ましい。研究の性質上、試料収集や読書に対し、アレルギーのある者は不適合であろう。

なお、卒業研究着手の条件としては、海外研修旅行（韓国、または東南アジア）に参加できることと、近代・日本・西洋建築史のうち、いずれか2科目の単位を取得していなければならない。

【構・計】——岸谷孝一教授（439-A号室）

■研究内容

当研究室は、大きく分けて二つの分野の研究を行っている。第一は建築材料学であり、主にコンクリートならびに建築仕上げ工法に関連した研究である。第二は建築防火計画学であり、防火安全工学、避難安全計画を中心としている。したがって、当研究室は構造系となっているが、構造と計画との境界領域に取り組んでいる。

■卒業研究テーマ

1. 防火材料・工法に関する研究

火災に対する安全性能の基本は、建築を構成する各種材料が燃えない、あるいは燃えにくいことである。防火材料は金属系・セラミック系・石灰系などと、これらの複合系があるが、本研究は防火材料・工法の評価と開発を行う。

2. 建築防火計画に関する研究

近年、建築物のデザインや機能に対するニーズが多様化し、新しい空間形態や技術を伴った設計が多くなってきた。そこで、建築計画の新たな展開と可能性に対応する建築物の防火計画に関する研究を行う。

3. 超コンクリート用混和材料に関する研究

最近のコンクリートは多様化、高品質化し、混和材料に依存する点が極めて大きい。新しい混和材料の実用化試験と使用基準の研究を行う。

4. その他

建築材料学、または建築防火計画学の分野で、希望するテーマがあれば相談に応じる。なお、コンクリート関

係は短大の横山先生の指導も受けられる。

■卒業生の就職傾向

岸谷教授は昭和62年度に就任したが、この年度から平成6年度までの卒業生の進路は、あわせて大学院10、建設会社52、設計事務所4、住宅産業13、設備・建材関係13、公務員8、自営業・団体など9であった。

当研究室の前身である材料研究室の卒業生は、昭和25年以来約480名となっており、多くは建設会社、設計事務所、次いで製造会社、公務員、教員、あるいは団体などで活躍している。

計———木村 翔教授・井上勝夫助教授
・橋本 修助手(583-A号室)

建築の目的は快適な居住空間の創造にある。建築の空間性能に係る



多くの要因の中で、当研究室では、音・振動環境の設計に関するテーマを扱っている。

また、当研究室では、建築学科のコンピュータやパソコンを駆使して、学生が独自のソフトを開発し、多くの成果をあげている。

さらに、これらのソフトの積み重ねにより組みあがれるシステムは、音環境の分野において、コンピュータ・グラフィックスを利用した各種のシミュレーションを可能にしており、特にホールの室内音響設計用システムは、すでにCADとして実用化されている。

このような伝統の中で卒研を行う諸君は、自然にコンピュータと親しむことができ、環境工学のみならず、建築のあらゆる分野に対応できる力を身につけて卒業していくことができるであろう。

■卒研テーマ

1. 集合住宅の音環境性能に関する研究

(1)床衝撃音の予測と評価、(2)木質系、鉄骨系プレハブ住宅の遮音性能の改善、(3)外周壁、隣戸間界壁の遮音、(4)軌道上や道路上に計画される建物内の騒音、振動の制御などを取り扱うもので、集合住宅の設計、施工に直接関係するテーマである。

2. 集合住宅の居住者意識に関する研究

集合住宅の居住環境は、建物自体の建築性能とともに、居住者の生活マナーや相隣関係などの要因が複雑に関連している。そこで、居住者の意識調査、分析を通して、居住者が日常生活の場で経験し、認識している問題を明確にし、総合的に把握していくための研究を行う。

3. 建築設備系の騒音振動制御方法に関する研究

建築物の高層化に伴い、建築設備の多様化が進むと、居住空間と設備機械室が混在し、音・振動環境の低下を

引き起こす。本研究テーマは、設備機器より発生する音・振動の制御と居住空間への伝搬について扱う。

4. 居室床の弾性と居住性に関する研究

最近、居住床として多種多様な仕上げが行われてきている。本研究テーマは、居住性からみた床とはどのような弾性を有するものが妥当なのか、また、安全上(転倒時など)好ましいのかを、実測調査および感覚試験を通して結論づけ、設計上の指針を表わそうとするものである。

5. 室内音場の評価に関する研究

ホールなどの室内音場の評価を行う場合、音量、音質や、空間的な音場印象などが重要なパラメータとなり、これらを評価するには音響測定法、聴き取り評価相互の面から総合的な検討を行うことが大切である。

研究テーマとしては、(1)音の到来方向などに着目した、三次元的な音場計測、評価法、(2)コンサート時の演奏者の立場を考慮した舞台内音場の評価、(3)体育館、アトリウム空間などでの音声の聴き取りやすさを表わす明瞭度評価などがあげられる。

6. 室内音響設計に関する研究

ホール、会議場や体育館などの大空間の音響設計に関するテーマについて、パーソナルコンピュータやグラフィック・ターミナルを用い、研究室で開発したソフトウェアによるコンピュータ・シミュレーション手法を活用し、室内音場の再現や評価について研究を行っている。

■就職の動向

木村研の卒業生は、建設会社の設計部、施工部門、設備会社、住宅産業、建材エンジニアリング部門、建築設計事務所、官公庁などで幅広く活躍しており、設計事務所で独立している人も多い。専門の音響関係では、大学院修士を中心に大手の技術研究所、音響コンサルタント事務所などに進出している。

計———小嶋勝衛教授・根上彰生講師
・宇於崎勝也助手(577-A・B号室)

本研究室では、研究テーマとして地区レベルから都市レベルを対象



に、以下のような視点を設定している。

1. 歴史——都市計画史、都市計画法制史、都市形成史

2. 調査・解析——都市調査法、土地利用解析、地域構造解析

3. 計画——都市空間の高度利用(空中権)、伝統的景観の保全、既成市街地の再整備(商店街の再開発・インナーシティ開

題等), 居住環境整備

4. デザイン——都市設計, 都市景観調査・解析・計画

5. その他——住民参加, etc.

これらの中から, 現在または近い将来での都市計画上の課題を踏まえ, 数回のミーティングにより各自の具体的な研究テーマを設定する。研究は個人またはグループで進める。

なお, 次の科目はぜひ取得しておいてほしい。

「都市計画」「建築法規及び行政」「建築設計製図」

その他, テーマによっては「建築史」「統計学」「電子演算」等の科目が, または外国語の語学力が必要な場合もある。

なお, 当研究室を窓口として, 浅香勝輔教授の指導を受けることもできる。主な研究テーマは「不動産事業史」に関するものであるが, 各自が興味を持っているテーマによっては相談に応じる。



構——齋藤公男教授・黒木二三夫短大講師
・岡田 章助手(439-C号室)

■研究の視座—空間構造のめざすもの

●構造という力学

に裏付けられた技術の世界と, 造形という人間のゆれ動く感性の世界を結ぶものは何か。

- 構造には本来, 安全性と経済性の確保という大役が課せられている。一方, 新しい建築空間をきりひらくという創造的役割のあることを, 歴史のあゆみは物語っている。空間構造の今日的な役割は何か。
- “力と形”が結晶した秩序ある自然界の形象は空間構造の原形。釣合形態と立体的な構成システムから生まれる合理性は, 大スパン架構の有力な手がかりとなる。

■基本テーマ

「空間構造に関する研究」

- 空間構造による大スパン建築の構成を試みる。
- 構造特性を理論・解析と実験の両面からとらえ, 設計基本データを蓄積する。
- 実際の構造物の性能を確認し, 理論と設計・施工との接点をさぐる。
- コンピュータを用いた, 形状解析や応力解析の手法を開発する。
- CG, CADによる空間構造の企画設計支援を, 構造計画画面から展開する。

- パソコンを用いた空間構造解析用ポストプロセッサ(画面出力プログラム)を開発する。

- 構造教育へのフィードバック手法を開発する。

■96のテーマ

- (1) テンション材料(ケーブルと膜)による空間構成
- (2) 木質系材料による空間構造システムの開発と応用
- (3) ケーブルを利用したドームやタワーなどの開発
- (4) ガラス・ウォールの開発と応用
- (5) サッカースタジアムの構造デザイン
- (6) 空間構造の歴史と現況
- (7) スペースデザイン
- (8) 構造教育用教材およびソフトの開発

■研究室の横顔

- “よく学び, よく遊ぶ”は研究室のモットー。テニス, スキー等もスポーツ力学で上達したいところ。
- 合宿, OB会, 現場見学会等を通じて, タテ・ヨコのつながりを。他を知り, そして自らを磨く。

計——関口克明教授 駿967-B号室, 習622-B号室)

■研究内容

日常生活における快適な空間を創造することは, 建築計画上の基本的な設計指針のひとつである。空間性能をいわゆる設計者のセンスで十分に生かすためには, 環境工学的な要因を総合的に把握して設計の中で具体化することであり, 環境情報の定量化と合理的な環境計画への応用は, 質の高い建築空間の創造に欠かせないものである。そのためには環境要因の的確な計測と評価, さらに設計・予測手法の確立が望まれます。

当研究室では音・光環境に関するテーマを扱っていますが, 吉野研究室(住環境総合評価, 環境工学とバリアフリー計画等)と実質的に共同で環境・情報研究室として活動しております。また希望者は, ゼミ活動の一環として照明コンサルタント(照明学会)の資格取得のための勉強会を行っています。

■卒業研究テーマ

[音環境]

1. コンピュータシミュレーションによる室内音場の予測と3D音場再生システムによる建築計画への応用
2. 騒音分布の予測と環境アセスメントに関する基礎的検討
3. 空調ダクト系騒音の伝搬予測に関する基礎的検討

[光・色環境]

1. 建築空間における照明・色彩計画に関する研究
2. 空間認知に対する各種生理量の定量化による検討

[複合環境]

1. 住環境の総合評価システムの開発に関する研究

音環境では最新の実時間畳み込み演算器を、光環境では脳波計やアイトラッカーによる生理量の定量化を試み、環境評価に対する新たな切り口を導入している。

上記の各研究テーマは、心理評価によるデータの統計処理から最新のデジタル技術、マルチメディアの総合によるもので、多くの基礎知識が要求されますが、研究を通して十分修得が可能であり、日頃より建築計画・環境工学に対して興味と理解のある人にとってメリットが大きい。

【計】——— 関沢勝一助教授・宇杉和夫講師
・柳田 武講師 (579号室)

〔関沢担当テーマ〕

教育施設の研究

(1) 小・中学校における新しい教育空間の研究



将来における教育方法の変化に対応するためには、学校建築はいかにあるべきか、また地域社会の中での学校建築はどうあるべきか、といった観点からその計画条件を研究する。

(2) 障害児のための学校建築の研究

養護学校（精神薄弱、肢体不自由など）の計画条件を実態調査を通して研究する。

研究室で継続的に勉強しているテーマは上記の通りであるが、卒業研究として勉強するテーマはこれにとらわれない。

〔宇杉担当テーマ〕

1. 空間および景観に関する理論的研究

(1) 空間論 建築空間・地域空間の構成・認識の方法、意味などの研究。近代と古代・中世の空間の違いなど。

(2) 景観論 都市景観・住宅地景観・田園景観の研究。

2. 住居・集合住宅・住宅地の研究

(1) 住居・集合住宅 日本の住宅の形成 近代住宅の形成の研究。コモンスペースとランドプランニングの研究。

(2) 住宅地・居住環境 都市居住とまちづくり。

3. 環境学習および地域環境学習施設の研究

(1) 環境学習 環境・空間・地域の学習システムと施設。

(2) 地域環境学習施設 既成の機能分類によらず、あらゆる施設を地域環境を学習する施設としてとらえる。

〔柳田担当テーマ〕

卒業研究としては、「建築の企画・計画・設計・製図のプロセスの中で、コンピューターをいかに活用するか」ということが大きな共通のテーマである。具体的には、

(1) 企画段階における事業収支計画

(2) 計画データの収集、統計的手法による集計・分析

(3) 平面計画、配置計画に用いられる数理的手法

(4) 計画・設計情報のデータベース化とその活用

(5) CAD / CGによる設計、デザイン・シミュレーション、プレゼンテーション

(6) FM (Facility Management) による施設の有効な運用

その他、関連したものであれば独自のテーマでもよいが、それらのうちからひとつを選び、パソコンによる具体的な作業を通して勉強する。

【計】——— 野村 欽教授・石田道孝講師 (965号室)

○野村研 (野村)

形態や機能本位に設計されている最近の建築物を、改めて設計の原点に戻り、「人間」



(健康な成人・高齢者・障害者を含めて) にとって真に好ましく、かつ望ましい建築物とする方策を探究する。

1. 住環境に関する研究

2. 住生活機器・設備に関する研究

3. 社会福祉施設・リハビリテーション施設に関する研究

4. 福祉のまちづくりに関する研究

5. 安全計画に関する研究

6. その他、当研究室にふさわしいテーマ

○石田研 (石田)

研究室では主に高齢者・障害者など、社会的にハンディキャップを持つ人々を対象に多様な研究テーマに取り組んできた。高齢化社会を迎えた現在、今後とも社会的要請の強い実践的テーマとして以下を設ける。

1. 高齢者・障害者のための住宅改造支援システムの提案

2. 都心における高齢者居住に関する研究

3. 総合福祉施設の今後の展開に関する研究

4. その他に、高齢者社会を踏まえた地域環境のあり方に関する研究

【構】——— 半貫敏夫教授 (432-A号室)・白井伸明助教授
・森泉和人助手 (431-B号室)

当研究室では、研究の目標を、主として「建築構造に関連する、工学的



的に有用な解析モデルの開発とその検証」において研究をすすめている。新年度の研究室構成は標記教員3名と大学院生9名である。各教員はそれぞれの研究テーマに関連する卒研を分担し、指導にあたる。以下に挙げた研究テーマのほか、積極的に自分でテーマを設定したい

場合も相談に応ずる。

■卒業研究テーマ

1. 非対称断面の鋼構造部材に関する弾塑性曲げ解析と実験（半貫）

変動外力を受ける非対称断面部材の弾塑性曲げを、適当な加力方法で実測し、これらの挙動を再現するためにスプライン関数、ファジィ推論等を利用した解析モデルを作りたい。本年はとくに繰り返し曲げに軸力の効果を考慮した実験および解析を行う予定。

2. 雪と建築の相互作用に関する研究（半貫）

a) 積雪層を支持基盤とする建築の不同沈下、建物に作用する雪荷重の性状など、雪と建築物の力学的相互作用に関する解析的研究

b) 氷の建築一補強氷構造物の可能性に関する模型実験

3. 鉄筋コンクリート構造物に対する解析・設計理論の構築と実験的検証（白井・森泉）

a) 高強度コンクリートおよび鉄筋を用いた構造物の力学的特性に関する研究

b) 高軸力や変動軸力を受けるRC柱を含む骨組み構造物の静的および動的弾塑性挙動に関する研究

c) コンクリートおよびRC構造物の強度・じん性・抵抗機構に関する破壊力学的研究

d) 鉄筋コンクリート構造物の損傷評価法に関する研究

e) その他（学生諸君の提示する自主テーマ）

■卒業生の就職傾向など

研究室の雰囲気は研究グループによっては厳しいところもあるが、平均的には自由。地味ではあるが、堅実。

前年の就職戦線は極めて厳しい状況にあったにもかかわらず善戦しており、その実績は大学院生では建設1、住宅1、設計事務所1、公務員1、また学部生は建設13、住宅4、製造1、不動産1、大学院4であった。

【構】——— 平山善吉教授・斉藤俊一助手（581-B号室）

■卒業研究テーマ

1. 木質構造の構造特性に関する研究

2. 南極昭和基地の建物に関する研究

3. 石膏コンクリートおよびアルミナセメントの低温特性に関する研究

■研究室

研究室は5号館の8階にある。研究活動は構造実験と解析を主体に活動を進めている。当研究室では「よく学び、よく遊ぶ」をモットーとしているのが特徴である。

■研究内容

当研究室では木質材料のLVL材（Laminated Veneer Lumber）、集成材を用いた構造物の研究を構造・材料

の両面から行っている。特に現在は、LVL材の有効な接合法（継手・仕口）に関する実験的研究を行っている。

また、日本の南極観測基地の建物に関する研究においては草分け的存在であり、最近では昭和基地管理棟建物に関する一連の研究がある。4年前、観測船「しらせ」に管理棟建物が積み込まれ、第一期工事が終了した。すでに昭和基地建物は築後約30年以上も経過し、老朽化している。そんな中、研究室の課題は絶えない。氷床建物の基礎的研究、不燃化木質系による新構造システムの研究、石膏コンクリートを用いた研究等が主な内容である。

上記のほか、研究室では電算機を用いた構造設計手法の修得も大きな課題の一つである。その主な目的は、電算機を用いた設計手法が多岐にわたっているため、設計における一連の流れをつかみ、構造的センスを養うことにある。これらの演習は、多数のパソコン用ソフトを用い、最先端の構造設計手法の話題も交えながら進めている。

■研究室の就職状況

研究室のここ数年の就職状況は、1. 大成建設(株)、2. 清水建設(株)、3. (株)大林組、4. (株)間組、5. 日本道路公団、6. 積水ハウス(株)、7. 大和ハウス工業(株)、8. 三井木材工業(株)等のほか、大手建設会社に就職している。

【構】——— 三橋博巳助教授（431-A号室）

■卒業研究テーマ

1. 寒冷地に建つ建築物に関する研究

(1) 南極基地建物に関する工学的諸問題

(2) 多雪地域における超高層建築物の人工

吹雪実験によるシミュレーションおよび現地調査

(3) 多雪地域のリゾート開発に関する研究

2. 建築物の寿命・耐用年数に関する研究

木造・非木造建築物の寿命実態調査と寿命推計、マンションの寿命、ストック、管理、建て替えの実態調査など

3. 都市・建築の防災計画に関する基礎的研究

地震、風、雪などの荷重による自然災害と都市の安全性、防災計画に関する調査研究

4. 高強度鉄筋コンクリート構造に関する研究

高強度材料を用いた鉄筋コンクリート有孔梁の耐力と変形に関する研究

5. その他

不動産に関するものなど、相談に応じます。

■卒業生の就職傾向

平成7年度卒業生は学部生12名で、建設会社2名、住宅関係3名、不動産関係3名、その他コンサルタントなど2名、大学院2名と多方面にわたる。



【構】——— 本岡順二郎教授・中山 優短大講師 (332号室)

■ 研究内容

当研究室は、鉄筋コンクリート(RC)およびプレストレストコンクリート(PC)を主とした分野を研究対象としている。



■ 卒業研究テーマ

1. 開口PCはりの研究

PCはりに大きな貫通孔を設ける要求は多いが、現状では適切な設計法が確立されていない。そこで、数年来この研究を続けてきた結果、特別の開口補強を施さない単一開口の場合については、実験的および理論的な研究を概ね完了した。本年は残された問題である補強方法、連続開口などについての研究を行うほか、実大試験体について総合的な加力実験を行う。

2. プレキャスト部材の接合に関する研究

建物の工業化の傾向にともなって、最近はプレキャストの利用、特に場所打ちとプレキャストを一体化して用いるハーフプレキャストの利用が急増している。この両者の結合にはコッターと結合筋が用いられるが、結合鉄筋の力学的挙動についてはなお不明の部分があり、また、接合面のコンクリートのせん断伝達機構に不明の点があるので、主に実験的研究を行う。

3. プレキャストPCの柱接合部に関する実験的研究

高強度コンクリートを用いた高層ラーメン構造を対象とした高軸力を受けるプレキャストPCの下層部柱脚について、地震時の挙動に関する接合部の弾塑性性状を実験的に調べ、解析結果を基にしプレキャストPC部材の履歴復元力特性のモデル化を行う。

【計】——— 本杉省三助教授 (578-A・B号室)

私たちの研究室では各自の自主的な活動、発想を重視しており、卒業研究のテーマは、その性質上、各自の申し出と相談の上で決められる。目下のところ、劇場、コンサートホール、多目的ホール、イベントスペース等、演劇、音楽、舞踊、ショーなどパフォーマンス空間についての調査や研究が多くを占めており、このため舞台美術、舞台照明、舞台監督、さらに演出、劇場運営といった幅広い関連分野の人々との交流や活動も多い。継続して研究を行っているテーマは、以下の通りである。



1. 劇場およびコンサートホールに関する研究

- (1) 舞台空間の使われ方とその構成
- (2) 客席の構成とデザインの問題
- (3) フレキシブルな上演空間の可能性
- (4) 舞台美術と劇空間
- (5) ホワイエ内の観客サービス機能

2. 設計方法に関する研究

3. 公共文化施設に関する研究

管理者や利用者のそれぞれの立場から見た地域文化施設の現状と今後の在り方を調査研究する。

4. 祭りの空間に関する研究

その他、各自が興味を持っている具体的なテーマがあれば相談に応じる。

【計】——— 吉田あきら教授・蜂巢浩生助手 (453号室)

吉田研究室は、建築設備、温熱環境(温・湿度分布、気流、温冷感など)、環境複合などを主な研究内容としており、また空気清浄の分野につ



いては国立公衆衛生院建築衛生学部の諸研究室と協力関係にある。1996年度は院生2名をあわせたスタッフが、これらの研究の運営にあたる。

これまで卒業生の多くが設備会社、設備設計事務所、建設会社や設計事務所の設備部門などに就職しているが、この分野はアメニティ豊かな未来の高性能建築を支える技術の中心であるため、バブル後も求人は他分野ほど減少していない。しかし、不況による他分野からの転向組も多く、応募者は急増しており、競争率の高さは今年も続くと思われる。女子の技術系総合職も制度としては定着しているが、これもバブル時代に多かった人材確保のための大量求人が反省期に入った結果、競争率は急上昇しており、男女を問わずプロへの指向を厳しく問われる傾向が95年度も顕著であった。

卒業研究のテーマは、研究室の継続課題である

1. 身体障害者等の温熱環境に関する研究
2. 実験動物施設の環境制御に関する研究
3. 温熱環境の数量的評価に関する基礎的研究
4. 地球にやさしいエネルギーシステムに関する研究
5. 設備意匠の研究

と、国立公衆衛生院の空気清浄に関する諸研究である。

身体障害者は、しばしば体温調節などの温熱環境への適応にも障害を持つが、本研究室は過去20年間の研究実績をもとに、高齢者・病弱者などへも対象を拡大しつつあり、また国際研究協力の推進力としても発展が期待されている。温熱環境の数量的評価基準についても、そのような幅広い個人差に対応しうるものを検討中である。

実験動物施設については、本研究室はその基準の充実や体系化に環境工学の分野から中心的役割を果たすべき立場にある。地球にやさしいエネルギーシステムに関する研究は、建築学会の学際的プロジェクトの一環である。設備意匠に関する研究も一層の発展を必要とする。

国際協力体制の強化のため、語学に優れた卒研究生・院

生候補も2～3名は欲しいところ。自主テーマは、当初から本人に十分具体的な計画が認められるものに限る。

【計】——— 若色峰郎教授・渡辺富雄助手(966号室)

当研究室は、建築の設計と計画の関連の中で建築空間や都市空間をとらえることを研究の主軸にしているので、建築の設計に興味を持ち、熱意のある人物が望ましい。



卒業研究は、その性質上、各自の自主的な研究に対する意欲によって成り立つものであり、独自のテーマで進める場合は、各自のテーマに対する具体的な研究方法や資料収集の方法を提示してほしい。

当研究室で継続して研究を行っているテーマは、次の通りである。

■ 研究内容

1. スポーツ・レクリエーション施設に関する研究

- (1) 広域圏のスポーツ・レクリエーション施設の研究
資料・文献等に基づく基礎的研究等
- (2) 地域における公共および民間スポーツ施設の研究
施設類型別にみた、施設の利用・使われ方などの調査研究等

2. 社会教育施設の研究

各施設系について、既存資料・文献・実態調査等に基づいた基礎的研究等

なお、当研究室を窓口として、海洋建築工学科の小林美夫教授(駿966号室、習231-B号室)によるゼミを受けることができる。

■ 研究内容

私たちの専門は設計と計画であり、大小の競技設計に積極的に参加したり、実際の設計活動に携わることによって創作のフィロソフィを求め、建築設計そのものといえる総合の方法について研究している。このような観点から最近では海の建築、シンボルタワー、キャンパス計画、武道館などを研究テーマとしている。

■ 卒業研究テーマ

1. 卒業設計・修士設計についての研究

国内外の建築系大学・大学院の卒業設計・修士設計の資料・作品を収集し、設計のテーマ、コンセプト、デザインなどについて分析的な考察を行う。

2. 海の建築

海洋建築論：海洋建築デザイン・計画論の他、厳島神社などの歴史的視点からのテーマなど

海洋景観論：日本三景など海景についてのテーマなど

■ 短期大学部建築コース所属研究室

以下の研究室では、建築学科教室の承認を得た上で、卒業研究の指導を受けることができる。

【構】——— 岡田 満講師(駿333号室、習926-A号室)

■ 研究内容

当研究室は、鉄筋コンクリート(RC)構造およびプレストレストコンクリート(PC)構造の研究を対象としている。



■ 卒業研究テーマ

1. PC架構の復元力特性に関する研究

PC造の建物は通常、柱、壁をRC造とし、梁をPC造としている。このPC梁が構造体全体の履歴性状に及ぼす影響について検討する。

2. 横拘束による鉄筋コンクリート部材の靱性改善に関する研究

鉄筋コンクリート部材に高い塑性変形能力を確保させるためには、圧縮コンクリートをいかに効果的に横拘束するかが重要な問題の一つである。本研究では横拘束筋をパラメータとして、ひずみ勾配を有するコンクリートの載荷実験を行い、横拘束による塑性変形能力を実験的に検討しようとするものである。

【計】——— 小石川正男助教授(駿333号室、習546-B号室)

■ 卒業研究テーマ

本研究室では、建築・スペース・環境に関連したデザイン・計画・設計を中心として、表現(創作)と調査(考察)を主な活動とする。



- Ex. ・設計競技(コンペ)を通じての制作
・建築・建築家の空間論およびデザイン論
・建築におけるテクスチャ(仕上げ)と意匠について
・建築におけるイメージと演出手法について

【構】——— 下村幸男助教授(駿333号室、習926-C号室)

■ 卒業研究テーマ

1. 地震工学、耐震設計に関する諸問題

2. 地盤と構造物の動的相互作用に関する諸問題

3. 杭基礎構造物の地震シミュレーション解析法に関する研究



この1年を通じ共に学び、語らい、卒研生諸君にとつ

て、学生生活最後の良き思い出となるよう共に努力したい。以下を読み、興味を持った熱意ある学生を希望する。

本年は特に、杭基礎構造物を対象にして研究を進めたいと思う。杭基礎構造物では、上部構造の自重および慣性力は杭を介して地盤に伝達される。設計では、この面のみを捉えて、地盤は抵抗側としてのみ作用すると考える場合が多い。しかし、同時に、地震動により地盤も変形し、この地盤変形が杭体に強制変形を与える。すなわち、地盤は入力側としても作用する。弾性波動論に基づき、これらの相互作用現象を学び、実用に供し得る簡易計算手法の開発を目指す。

なお、昨今設計施工されている建造物の過半の基礎は杭基礎であり、ウォーターフロント開発等の盛んな現在、その地震時の挙動の的確な把握が特に重要である。

【構】——— 内藤正昭講師 習926-B号室)

■ 研究内容

南極昭和基地の観測用建物の基礎部分の建築材料として、アルミナセメントコンクリートが打設されて約30年が経過している。当研究室では、昭和基地から持ち帰った骨材を用い、低温環境下で打設・養生したアルミナセメントコンクリートやアルミナセメントを用いた鉄筋コンクリート梁の力学的特性について、実験的研究を継続して行っている。

■ 卒業研究テーマ

1. アルミナセメント鉄筋コンクリート梁の低温環境下での強度に関する研究

昭和基地の建物建設時期の気象条件を大型低温室内に再現した室内で、アルミナセメント・昭和基地産骨材を用い、打設および養生した鉄筋コンクリート梁の強度について実験的研究を行う。

また、アルミナセメントや低温環境下でのコンクリートに関する論文調査を行う。

2. 木質構造の構造システムに関する研究

これまでの昭和基地建物に用いられている、木質系プレファブ建築のシステムに関する研究で、平山研究室と共同研究を行っていく。

【構】——— 横山 清教授 駿439-A号室)

■ 研究内容

主としてコンクリートの初期性状に関する実験研究を継続して行っている。

■ 卒業研究テーマ

1. コンクリートの初期ひびわれに関する実験研究

高流動コンクリートの初期ひびわれに関して、拘束コ

ンクリート板を用いて実験を行い、セメントならびに混和材の種類がひびわれ性状に及ぼす影響について検討する。

2. コンクリートの初期収縮に関する研究

ごく初期より乾燥したコンクリートの収縮性状について実験を行い、収縮機構について考察する。

【計】——— 吉野泰子講師 駿967-B号室、習545-A号室)

■ 卒業研究テーマ

1. 集合住宅における複合環境(音・光・温熱・空気環境)の調査・解析

従来行ってきたRC造中層集合住宅内で
の夏・冬を主体とした複合環境の実態調査に加え、春・秋の中間期の傾向を把握し、総合評価への足がかりとする。

人類共通のテーマとなっている環境共生をベースに環境家計簿など、省エネ意識を反映した総合評価指標を共に考えてみたい。

本年度は、物理指標に加え、生理・心理評価の基礎的検討を試みる予定である。

2. 複合環境調査の測定法に関する検討

集合住宅やオフィスの複合環境調査で行ってきた、現場実験における測定法の問題点を明らかにする一方、更なる測定精度の向上、簡易測定法を検討する。

3. 複合環境の総合評価法への課題

上記1、2を総合的にプロデュースする方策の検討

4. 個人の暴露騒音と居住環境性能について

(サウンドエデュケーションに関する研究)

環境教育の一環として、生活音を切り口とした聴取訓練やLeqメーターの有効活用により、サウンドスケープに関する関心を高め、住まい方の観点から快適音環境創出のためのガイドラインを検討する。

5. 環境工学とバリアフリー計画

バリアフリーのための環境工学的アプローチを提案

6. インテンシブ調査と環境行政

国道296号線における交通騒音調査の一例から

7. 大規模開発に関する騒音・振動アセスメント

当該環境影響評価のモデル地区における騒音・振動アセスメントのための手続きと手法を学ぶ。

なお、研究活動は関口研究室と共同で行う。

95 設計競技入選者一覧

設計競技名	受賞名	作品名	受賞学生氏名
東京都学生卒業設計コンクール (95.4) 主催：(社)新日本建築家協会関東甲信越支部	佳作	ゼロの風景 —永遠の反復もしくは 断片化された都市型墓地—	M-5006 石鍋壮史 (若色研)
第27回毎日・DAS学生デザイン賞 (95.5) 主催：毎日新聞社 (社)総合デザイナー協会 (DAS)	入選	都市の遊歩空間	M-5012 内田善尚 (小谷・本杉研)
第5回BUFF国際デザインコンペ (95.5) 主催：BUFF 95運営委員会	優秀賞	(課題) 東京水空間 (作品名) Under the Bridge	研究生 山崎栄介 (関沢研)
第30回セントラル硝子国際建築設計競技 (95.7) 主催：セントラル硝子㈱	最優秀賞	(課題) 迎賓館 (作品名) 再生	M-5053 矢板文男 (関沢研) M-5008 石原 亮 (関沢研) M-5012 内田善尚 (小谷・本杉研)
第6回学生のためのフレッシュ デザインコンペ (95.10) 主催：コーナン建設㈱	フレッシュ デザイン賞	Free the Taboo —Water from Ecstatic Point of View—	M-5003 新井健太 (関沢研) M-5006 石鍋壮史 (若色研) M-5012 内田善尚 (小谷・本杉研)
日本建築学会設計競技 第1部 (一般の部) (95.10) 主催：(社)日本建築学会	支部入選	(課題) テンボラリー・ハウジング (作品名) Core of the Flows	M-5003 新井健太 (関沢研) M-5012 内田善尚 (小谷・本杉研)
日本建築学会設計競技 第2部 (学生の部) (95.10) 主催：(社)日本建築学会	支部入選 全国入選 (優秀作品)	(課題) テンボラリー・ハウジング (作品名) ぶくぶくハウス	2253 的場喜郎 (関沢研)
第7回タキロン・国際デザイン コンペティション 95 (95.10) 主催：タキロン㈱	3等	(課題) 都市のつぼ (作品名) イコンのたまり場 —居酒屋+演説台—	M-5003 新井健太 (関沢研) M-5012 内田善尚 (小谷・本杉研)
第10回メンブレインデザイン コンペティション (95.10) 主催：太陽工業㈱	佳作	(課題) Super Space —Playing (作品名) Play on the Cloud —2重ケーブル支持膜 構造による空隙空間—	M-5010 伊藤力哉 (若色研) M-5028 小林真一郎 (斎藤研)
NARASHINO DOME COMPETITION 95 (95.11) 主催：習志野祭・習志野ドームコンペティショ ン実行委員会	優秀賞 (実施案)	雲の上の茶屋	M-5010 伊藤力哉 (若色研) M-5028 小林真一郎 (斎藤研)
	優秀賞 (実施案)	Festi-Balloon	M-5036 高橋正明 (関沢研) M-5022 城戸隆宏 (斎藤研)
	アイデア賞	Memories	M-5003 新井健太 (関沢研) M-5006 石鍋壮史 (若色研)

第42回 全国工業高等学校設計競技報告

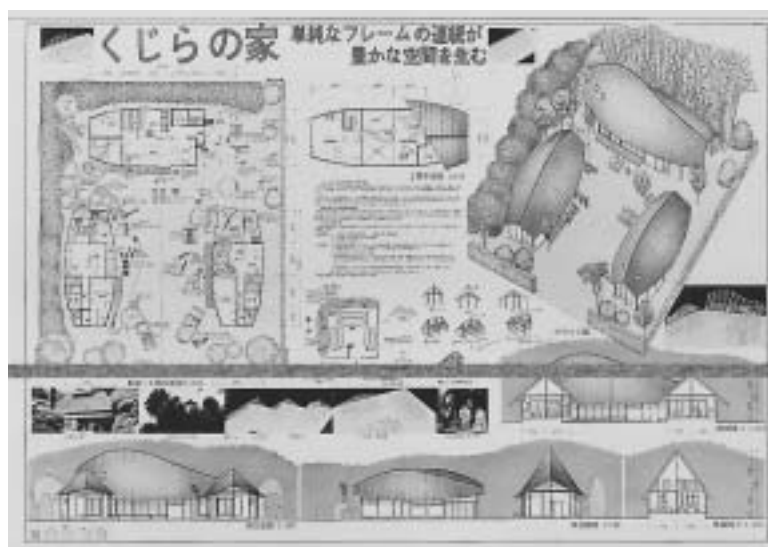
テーマ：木の住まい

「木の住まい」という課題テーマに、全国31校より70点の応募がありました。

わが国の「住まい」は長い歴史のなかで、風土に根ざした文化や習慣を育んできましたが、「木の住まい」は21世紀を目前にして、多様化・高度化する住まいの要望にどのように応えられるか。また、木のもつ素材の評価を再確認して、これからのニーズに応えられる木の住まいと、快適な暮らしの提案を求めることが課題の主旨でした。

応募作品は多様な視点より「木」や「住まい」を追求し、バラエティーに富んだコンセプトを展開しており、特に集成材や構造・構法に着目した提案も多く、RC造やS造との混構造の空間提案や、防災や安全を考慮した案など、例年の「住まい」シリーズとしてのコンペでは見られない社会的、現実的な主張があったことが特徴です。

また、地域やそれぞれの環境のなかでの取り組みや、わが国における間伐材の問題を背景に表現するなど、それぞれが単に理想や夢を追求するだけでなく、高校生がさまざまなコンセプトで解答してくれたことを、審査員一同高く評価しました。



1等 關根理恵子

年々、プレゼンテーションの向上が見られますが、CGを使用した表現も登場するなど、応募作品にはその情熱が感じられます。しかし一方では、毎年各高校のプレゼンテーションが画一的（伝統的？）になり、図面を見ただけで応募校が判別できるといった現象も気になるところです。

入選作品は、工学部、生産工学部、理工学部と巡回展示され、12月4日、主婦の友ビルにて表彰式と祝賀会を行い、審査委員と各高校の生徒や先生方との懇談のなかで、本設計競技の取り組み方や各校の現況など、交歓の場を経て終了しました。

（短大助教授 小石川正男）

入賞者

1等	關根理恵子（群馬県立館林商工高校3年）
2等	有馬智昭（三重県立四日市工業高校2年）
	田中基嗣（大分県立大分工業高校3年）
3等	大津康弘（大分県立鶴崎工業高校3年）
	中川真吾（静岡県立静岡工業高校3年）
	三浦文子（青森県立弘前工業高校2年）
佳作	石井秀明（兵庫県立龍野実業高校3年）
	石塚裕美（群馬県立館林商工高校3年）
	畑山義昭（兵庫県立神戸工業高校3年）
	原さとこ（三重県立四日市工業高校3年）

■半貫敏夫教授は大学院生高橋誠一、大塚弘樹君と連名で「個別要素法による雪洞周壁の動的崩壊解析」と題する論文を、11月に札幌で開催された第11回寒地技術シンポジウムで発表した。

■三橋博巳助教授は1995年7月25日～27日、オーストラリア、ゴールドコーストで開催された第5回東アジア・太平洋構造工学国際会議（Fifth East Asia—Pacific Conference on Structural Engineering and Construction）に出席し、三橋博巳、広沢雅也、清水泰著『Shear Strength of High Strength

教室ぶろむなード

Concrete Beam with an Opening」と題する論文を発表した。

■小石川正男短大助教授は「建築コンペ図面展（入選作品30点を中心として）」を桜建会理工部会の協力を得て、10月2日より7日まで北沢ギャラリー（千代田区神田神保町）にて開催した。なお期間中、本学学生および他大学学生、校友、建築関係者約600名の見学者があった。

■井上勝夫助教授、木村翔教授、前原暁洋氏、渡辺秀夫氏、松岡明彦氏連名の原著論文「床歩行時の足裏各部の衝撃力特性—歩行感からみた住宅床の振動応答特性と床衝撃音遮断性能に関する研究 その1—」が日本建築学会計画系論文集No.477（1995.11）に掲載された。

■大川三雄助手の原著論文「北尾春道の著作にみる特徴とその性格—『数寄屋聚成』とその時代背景—」が日本建築学会計画系論文集No.478（1995.12）に掲載された。

●駿建日次 (1996.1 Vol.23 No.4 通巻92号)	連続公開講座「都市」(フジタ・都市講座)	建築系教員交流会 郡山セミナー報告	9
	フジタ・都市講座を終えて	卒業研究着手について	10
	連続公開講座「都市」を終えて	95 設計競技入選者一覧	19
	イタリアの風の中で	全国工業高等学校設計競技報告	20
	第27回建築学生海外研修旅行報告	教室ぶろむなード	20

『駿建』 発行者・木村 翔：千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724

■平成7年度編集委員：半貫敏夫・井上勝夫・三橋博巳・志田弘二・黒木二三夫

■印刷：富士美術印刷㈱